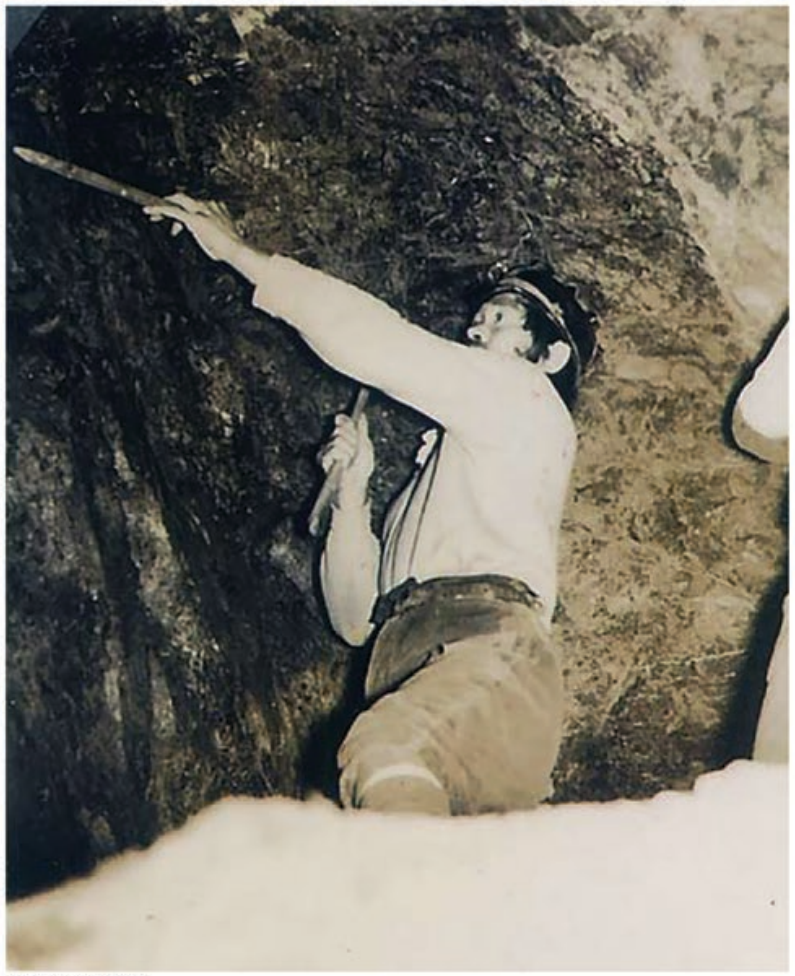
ふるさとの誇り

其の20

山中に分校ができるほどの賑わい
芦安鉱山


鉱山の採掘風景

薄くダイナマイトの文字が見える木箱

コンクリートで塞がれている坑道入口

南アルプスに鉱山があったのをご存知ですか。早川左岸の高台にあり、大正3年から昭和30年代の初めまで銅や金を産出し、早川側からドノコヤ峠（1，586m）を越えて御勅使川の芦安地区まで運び出していました。鉱山のあった場所は、町村境が未確定で当時は芦安村分と考えられていました。昭和11年、芦安村と西山村（現早川町）の境界線確定により現在は早川町にあります。現在、芦安からこの峠を越え、早川町側の沢沿いにしばらく下ると、右手側に住むために造成した石積み等が見えてきます。ここが芦安鉱山の跡です。殆どの建物は朽ち果て、坑道も塞がれていますが、従業員の住宅や学校跡などがあり一升瓶や陶磁器など、当時を偲ばせるものが今でも見ることができます。

鉱山は大正3年、東京の実業家によって、『土ノ木屋』（注1）山の金銅鉱石の採掘を県に出願し鉱山局より許可が下りたことにより、開発が始まります。鉱山では銅と少量の金が採掘され、地下を坑道が縦横に走っていたといいます。鉱山への道は険しく山道は未整備だったため、桃の木温泉まで索道（空中に架け渡したケーブル）が作られ、鉱石や物資が運搬されました。

最盛期には250名程が鉱山で暮らし、芦安小学校の分校も設置されるなど大変な賑わいを見せました。

しかし、戦後は外国からの良質で安価な鉱石におされ、採算が取れずに閉山に追い込まれました。その後、昭和20年代の終わり頃、小規模ながら鉱山が再開されますが30年代初めに再び閉山し、現在に至っています。

芦安地区のお年寄りの話によると、この芦安鉱山の他、金山沢、下梅津沢でも一時期銅鉱石を掘ったことがあるそうです。

（注1）ドノコヤには土ノ木屋、土ノ小屋、銅之古家等の漢字が使われました。

建物は崩れているが当時の面影を伝えている住居跡

鉱山の前で記念撮影

現在も住居跡などで見ることがでる一升瓶

芦安小学校では平成17年に6年生が、総合学習の時間に「芦安小学校のあゆみ」をテーマに勉強し、鉱山と分校があったことを知ります。実際に鉱山と分校跡を訪ね、卒業制作として冊子「わたしたちが見た芦安鉱山」を作っています。この中で「分校にいけてよかった。また行ってみたい。」「想像した以上の場所で感動しました。」など感想をつづっています。